

ドラマ「銀河の一票」を見ていると、政治とは誰のために存在しているのかを改めて考えさせられる。

力のある政治家たちが、党派性や組織防衛を優先しながら動いていく中で、秘書の娘が既存の政治に異議を唱えていく姿は、単なるドラマの展開ではなく、今の社会そのものを映しているように感じた。

特に印象的だったのは、「声を持たない人」が物語を動かしていく構図である。

これまで政治の中心にいたのは、力を持つ者、影響力を持つ者、組織を動かせる者たちだった。しかし、その一方で、社会には長い間“周辺”に置かれてきた人たちがいる。

精神障がいを抱えながら地域で懸命に生活している人。  
生活困窮の中で、誰にも相談できず孤立している人。  
学校へ行けないことで、自分を責め続けている子どもたち。  
ひきこもりの状態の中で、「社会に戻れない自分」を責めている若者。  
そして、その姿を見守りながら、不安と孤独を抱えている家族。

こうした人たちは、社会の中で「少数者」として扱われやすい。  
しかし、本当に少数なのだろうか。

実際には、生きづらさを抱えている人は決して少なくない。  
ただ、その苦しみが見えにくいだけであり、声になりにくいだけであり、社会の中心から遠ざけられているだけなのかもしれない。

ドラマの中で秘書の娘が示した“反乱”とは、単なる怒りではなく、「見えていなかった声を社会の中心へ押し戻す行為」だったように思う。

これは、私たちの地域社会にも通じている。

不登校の子どもたちは、「学校へ行くこと」を前提に作られた社会の中で苦しんでいる。しかし、本当に必要なのは、「学校へ戻すこと」だけなのだろうか。

まず必要なのは、その子どもが安心して存在できる居場所であり、「そのままでも大丈夫」と感じられる関係性なのではないかと思う。

ひきこもりの問題も同じである。

社会は「外へ出ること」を正解として語りがちだが、本人たちは長い時間の中で傷つき、人間関係への恐怖や、自信の喪失を抱えていることが少なくない。その人たちに必要なのは、「早く変わりなさい」という圧力ではなく、安心して失敗できる環境や、ゆっくり関わられる伴走者の存在なのだと思う。

精神障がいを抱える人たちも、社会の中で偏見や誤解にさらされやすい。

「怖い」「特別な人」といった古いイメージが今なお残り、地域の中で孤立してしまうこともある。

しかし、実際に関わると、その人たちは決して“特別な存在”ではない。悩み、笑い、失敗し、人とのつながりを求めながら日々を生活している、一人の生活者である。

にもかかわらず、社会は「生産性」や「効率」を優先する中で、弱い立場の人たちを周辺へ追いやってしまう。

そして、支援制度さえも、ときに「制度に合う人」だけを対象にしてしまう危うさを持っている。

だからこそ、今必要なのは、「支援する側」と「支援される側」を分ける考え方を超えていくことなのかもしれない。

少数者の人たちは、“助けられるだけの存在”ではない。

むしろ、社会が見失ってしまった大切な価値を教えてくれる存在でもある。

ゆっくり生きること。

競争だけが人生ではないこと。

人は弱さを抱えながら生きていること。

安心できる関係性が、人を回復させること。

そして、「役に立つかどうか」だけで人の価値は決まらないということ。

「銀河の一票」が描いていたのは、単なる政治改革ではなく、「誰を社会の主人公として描くのか」という問いだったのではないだろうか。

力のある者だけが社会を動かすのではなく、これまで見過ごされてきた人たちの声によって社会が変わっていく。

それは理想論ではなく、むしろ閉塞感を打ち破るために必要な視点なのだと思う。

本当に豊かな社会とは、強い人だけが活躍できる社会ではない。  
生きづらさを抱えた人も、安心して「ここにいていい」と思える社会である。

そして、その社会を作る第一歩は、「少数者」と呼ばれてきた人たちを、“支援の対象”として見るだけでなく、一緒に社会をつくる主体として見つめ直すことなのかもしれない。